

15世紀体僕制紛争をめぐる都市・領主間の往復書簡
: バーゼル農村邦国立公文書館所蔵史料より

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 俊之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23815

15 世紀体僕制紛争をめぐる都市・領主間の往復書簡

——バーゼル農村邦国立公文書館所蔵史料より——

田 中 俊 之

I. 村落紛争史と古文書

中・近世の西ヨーロッパ村落史の研究が近年ますます盛んであるが、それは従来の社会的結合などの中心テーマに加え、紛争史研究へのアプローチが村落史に関しても盛んになってきたことと軌を一にしていると見てよいだろう¹。しかし村落史研究が都市史研究に比べ、全体として遅れを見せているといわざるをえないのは、史料的問題におもな原因があるように思われる。ヴァイステューマー（判告集）²など一部の法史料が刊行されている以外には、村落史関係の史料はほとんどが未刊行のままであるといつてよい。しかしそれ以上に、そもそも史料の残存状況そのものの悪さが致命的となって、村落史にいくつもの空白をもたらしている。その空白を埋めることが都市史研究との連携の下ですら至難の業であることは容易に想像できよう。それゆえ村落史研究の進展のためにできることの1つは、せめても公文書館に眠る古文書史料を少しずつでも発掘し、血肉化していく作業なのである。

こうした現状をふまえ、本稿では、バーゼル農村邦国立公文書館 (Staatsarchiv des Kantons Basel-Landschaft)³に所蔵されている古文書 *Altes Archiv* (略号 AA) の AA1001 Urkunden 537のうち 90-102 ページについて活字化を試みた。

ヨーロッパ各地の公文書館と同様、当公文書館においても現在、その膨大な量の古文書の概要をデータベース化する作業が進められている。その成果は 2005 年前後以降、逐次インターネット上で公開されるようになるなど、利用者への便宜が図られているが⁴、現在までにデータベース化が完了しているのは全体のほんの一部分にとどまるため、所蔵されている古文書群の全体像を知るにはまだ程遠いといわざるをえない。今後ますますの進捗が期待される場所である。本稿が対象とする古文書はすでにデータベース化されており、記述はきわめて簡潔ながら、インターネット上でその概要を知ることができる。AA1001 Urkunden 537とは古文書の分類番号である。13世紀から1832/33年までを収める *Altes Archiv* のうち AA1001 には、1239年から1789年までの期間の証書類、いわゆるウアクンデ *Urkunde* がおよそ 1450 収められているが、そのうちの1つがこの 537 番文書であり、データベースには 1466 年と記されている。537 番文書の現物は紐で綴じられた縦約 30 センチ、横約 22 センチの冊子数冊から成り、ページ番号が数冊の冊子全体に通して振られている。それは 220 ページに及び、内容も多様で盛りだくさんであるが、なかでも本稿が扱う 90-102 ページは、内容としても史料としても特異でありかつ貴重であると思われるため、ここに活字化を試みたしだいである。

537 番文書が扱っているのはおもに、北西スイスの大都市バーゼルと騎士ハンス・ベルンハルト・フォン・エプティンゲンとのあいだに生じた支配権（裁判権）をめぐるさまざまな紛争であ

る。中世後期のスイスにおいて、チューリヒ、ルツェルン、ベルンなどの大都市はすでに領域拡大政策を展開していたが⁵、15世紀にはバーゼルもまた領域拡大に乗り出し、そのため近隣領主層とのあいだで支配権（裁判権）をめぐる紛争が絶えなかった⁶。紛争は仲裁者もしくは裁判を介して解決が図られ、そのときにはじめて文書化される。都市・領主間の紛争であれ、近隣領主間の紛争であれ、紛争解決の一連の過程において、紛争当事者双方からの訴え、反論、仲裁者や裁判による証人尋問、合意内容などが記された文書が数多く作成されたのである。537番文書はまさにこうしたさまざまな紛争の断片的記録の集成であるといつてよい。なかでも90-102ページの部分は、ハンス・ベルンハルト・フォン・エプティンゲンとその支配下にあった村落プラッテルンの一農民とのあいだに生じた体僕制をめぐる紛争に、バーゼルが仲裁者として関与した事例の記録であり、体僕制を原因とする領主・農民間紛争の争点とともに、体僕制をめぐる展開する都市・領主・農民の相互関係を読み取ることができる貴重な史料といえることができる。むしろこの部分だけで領主・農民関係、さらには都市を加えた三者の相互関係の全体が把握できるわけではなく、本稿での分析も十分ではない。したがって本稿は、手稿史料の活字化をふまえて今後、他の関連史料にも目を配りながら全体像を描くための準備作業にとどまる。以下まずは背景説明として、村落プラッテルンにおける体僕制の導入とそれをめぐる領主・農民間紛争について概観しておこう。

II. 村落プラッテルンにおける体僕制紛争の勃発

プラッテルンはバーゼルの東部近郊に位置する比較的大きな村落であり、ハプスブルク家の封臣であるエプティンゲン家の所領の1つであった⁷。1464年以前にはエプティンゲン家の2つの分家系の分割統治下にあり、ハンス・ベルンハルトが村落全体の4分の1を、従兄弟のアントン、ヴィルヘルムが4分の3をそれぞれ支配下においていたが、1464年夏に従兄弟たちがハンス・ベルンハルトにすべての土地所有権、裁判権を売却したことにより、ハンス・ベルンハルトはプラッテルン全体に支配を及ぼす単独の村落領主になったのである。エプティンゲン家はすでにバーゼルをはじめ近郊の領主層とのあいだに、おもに支配権（裁判権）をめぐる大小さまざまな紛争を繰り返していたが、ハンス・ベルンハルトは、これら1464年以前より継続中の対外的な紛争に加え、村落プラッテルンが単独統治に切り替わったことによって、新たな紛争を対内的に抱えることとなった。体僕制導入をめぐる領主・農民間紛争である。

15世紀の西南ドイツや北西スイスで頻発した領主・農民間紛争、それらはしばしば大がかりな農民蜂起に発展することもあったが、紛争勃発の主要因が領主による体僕制の導入にあったことは広く認識されているといつてよい⁸。14・15世紀の全体的危機のなかで、とりわけ農業不況による所領経営の困難に直面した領主層の多くは、所領の一部を質入れもしくは売却する一方で、領主支配権の再編・強化にむけて、領民に対し体僕制を導入する場合もあった。体僕身分に落とされた農民はおしなべて、移動の自由の制限、身分外婚ないし領外婚の禁止、死亡税や人頭税ならびに賦役や軍役をともなった人格的な拘束や経済的な負担義務など、自由農民に比べ強固な人格的支配をうける形で領主に隷属することとなったのである⁹。しかし領主によるこうした体僕

支配は農民の強い反発を招き、多くの地域で大小さまざまな領主・農民間紛争が勃発した。村落プラッテルンにおいてもまた、領主ハンス・ベルンハルトによる体僕制導入は新たな領主・農民間紛争を惹起したのである。

体僕制を導入した領主は体僕に対して忠誠宣誓をたびたび求めたが、それに反発した農民（体僕）はしばしば宣誓拒否という手段で応じた。プラッテルンでは1464年9月から11月にかけて7回にわたり、隷属民（die hörigen Leute）が領主ハンス・ベルンハルトに忠誠宣誓をおこなった旨の記録があるが¹⁰、やがて彼ら隷属民のなかから領主に対する宣誓を強く拒否する者たちが現れたのである。リップマンによれば、プラッテルンの領民119名のうち90名が体僕（Leibeigene）、29名が庇護民（Hintersasse）であったが¹¹、その後およそ1年余りのあいだに、体僕9名と庇護民2名の男たちが宣誓日に欠席するなどして宣誓拒否の態度を示した。宣誓拒否は、ハンス・ベルンハルトの体僕領主支配に強く異議が唱えられたことを意味している。

こうした形での異議申し立ての理由として、さしあたり以下の3点が考えられよう。第1に、村落共同体自治の変化である。それまでの分割統治下において村落の少なくとも2つの部分に別々に存在していた共同体が、ハンス・ベルンハルトの単独統治によって再編・統合された結果、共同体機能の半分以上が失われたと見ることができる。ハンス・ベルンハルトが新たに獲得した4分の3の村域における共同体組織が、おそらくはそれまで維持してきたであろう自律性を喪失してしまう危険に陥ったのである。忠誠宣誓を拒否した農民たちがこの新たな統合の対象となった村域の住民であったとすれば、リップマンが指摘するように、彼らにとっては共同体の自律性を著しく損なわせたハンス・ベルンハルトを新たに正当な領主とは認めがたかったと考えることができるだろう¹²。彼らにとって新領主への結びつき、帰属意識はきわめて希薄であり、体僕としての服従強制には到底従えるものではなかったということになる。

第2に、家父長制的村落秩序の崩壊である。リップマンは領民119名の内訳として男62名、女57名を数え上げており、ハンス・ベルンハルトが体僕としての忠誠宣誓を村落住民すべて、すなわち男にも女にも一律に課したことは、村落において家長たちの家父長的自己意識を失わせるものであったと指摘している¹³。忠誠宣誓とは元来、慣習的に14/15歳以上の男子のみが関与できる政治行為であったが、ここで男女を問わない体僕宣誓強制は、宣誓という村落秩序の1つとしての政治行為そのものの意義を失わせたと考えることができる。それは男の家長を中心に代々維持してきた家父長制的伝統の崩壊を意味したのであり、領主・農民間の保護・奉仕関係を成り立たせてきた一定の基盤が領主によってここで一方的に奪われたということになる。

第3に、農民個人の名誉意識の高揚である。近年の研究が明らかにしたように、中・近世社会において名誉はさまざまな紛争の重要なファクターの1つであった¹⁴。名誉は、それが家門・血統・軍功などと結びつく貴族（騎士）社会に固有のものではなく、都市や農村においても、共同体内における個人の政治的地位や職業にもとづく社会的な評価に密接不可分の価値観として、あらゆる人々の日常の営為を制御していたのである。特に名誉が傷つきやすく壊れやすいという属性を有していたがゆえに、しばしば紛争を招く要因たりえた。とりわけ農村社会においては、12・13世紀の農業生産力の増大が農民に地位の向上をもたらし、村落共同体に一定の自治機能が与え

られることによって、農民の名誉意識、権利意識が高まっていたと考えられるが、15世紀の北西スイスにおけるいわゆる領主反動（体僕制の導入）は、この地域の農民の地位を極端に貶め、既得のさまざまな自由、権利を奪うことによって、農民に強い不名誉感情を喚起したと見てよいだろう。1525年の農民戦争時にプラッテルン農民が示した抗議書の第1条には、「体僕制から解放されることを第一に望む。なぜなら自分たちは隷属民ではないと多くの者が考えているからだ。」と書かれており¹⁵、農民にとって劣悪な法的地位への強い忌避感こそが抗議の第一義であったことが読み取れる。1464年の体僕制導入がその根源だったと考えてよいだろう。

プラッテルンにおける領主・農民間紛争は、1465年、バーゼルの仲裁により解決が図られ、プラッテルン農民はプラッテルン東に隣接するバーゼル管区リースタールの中心都市リースタールの都市法に服する旨の合意がハンス・ベルンハルトと農民とのあいだに成立した。しかしその合意は一時的なものにとどまり、その後、紛争はますます拡大したのである。1467年12月には38名のプラッテルン農民が都市ソロトゥルンとブルクレヒト契約を結び、ソロトゥルンから市民権を獲得した。当初、38名はバーゼルに市外市民としての受入れを要望していたが、バーゼルがこれを拒否したため、ソロトゥルンに同様の受入れを求め、認められたのである。先に挙げた体僕9名と庇護民2名が38名のなかで中心的役割を担ったであろうことは想像に難くない。しかしこのことによって、領主・農民間紛争が再燃すると同時に、ハンス・ベルンハルトはソロトゥルンとも敵対関係に陥ったのである。ソロトゥルンが38名とブルクレヒト契約を結んだのは、ソロトゥルン自身の領域拡大政策を有利に進めるためであったと考えられよう。ソロトゥルンはプラッテルン農民に市民権を与えることにより、プラッテルンに影響力を及ぼすきっかけをつかんだのである。それは同じく領域拡大を模索するバーゼルとの対抗関係を顕在化させたのであり、ソロトゥルンはハンス・ベルンハルトのみならず、バーゼルとのあいだにも緊張関係を生じさせたのである。プラッテルンにおける領主・農民間紛争は、こうして領主対農民の枠組みを越え、都市・領主間紛争、都市・都市間紛争の色彩を加えながら、1468年以降さらなる展開を見せるが、それはすでに本稿の対象範囲を超えており、これ以上は立ち入らない。

537番文書90-102ページで扱われている案件は、以上のような背景の下、紛争の展開を促すきっかけの1つとなった事件と位置づけられる。当事者は、領主ハンス・ベルンハルトと、富裕農民でありながら体僕とされたクレヴィン・リュッチンである。この紛争にはバーゼルが仲裁者として関与し、ハンス・ベルンハルトとのあいだに協約を取り交わしたが紛争は終息せず、それをめぐってバーゼルとハンス・ベルンハルトとのあいだで往復書簡が交わされた。この紛争において体僕制をめぐる何が争われ、バーゼルとハンス・ベルンハルトの双方がそれにどのように対処したのか。本稿では以下、解読できた範囲で史料の解題を試みることにしたい。

Ⅲ. 体僕クレヴィン・リュッチン事件をめぐる都市・領主・農民関係

537番文書90-102ページは、バーゼルの市長ハンス・フォン・ベーレンフェルスとバーゼル都市参事会の名で出された1465年8月1日の布告(90)と、その後、バーゼルとハンス・ベルンハルトとのあいだで交わされた往復書簡(91-102)から成り立っている。残念ながらいずれもオ

リジナルではなくコピーである。往復書簡の部分は、第 1 通としてバーゼルからハンス・ベルンハルトへ (91)、第 2 通としてハンス・ベルンハルトからバーゼルへ (91-93)、第 3 通としてバーゼルからハンス・ベルンハルトへ (93-94)、第 4 通としてハンス・ベルンハルトからバーゼルへ (94-97)、第 5 通としてバーゼルからハンス・ベルンハルトへ (98)、第 6 通としてハンス・ベルンハルトからバーゼルへ (98-100)、第 7 通として同じくハンス・ベルンハルトからバーゼルへ (100)、第 8 通としてバーゼルからハンス・ベルンハルトへ (100-101)、第 9 通として同じくバーゼルからハンス・ベルンハルトへ (101-102) という構成になっていることが読み取れる。

構成についての判断根拠は、文面のスタイルである。バーゼルからハンス・ベルンハルトへの書簡と判断したものは一貫して、冒頭が「権威ある領主たる騎士ベルンハルト・フォン・エプティンゲンへ」で始まり、主格は **wir**、末尾が「市長たる騎士ハンス・フォン・ペーレンフェルスとバーゼル都市参事会」という署名で終わっている。他方、ハンス・ベルンハルトからバーゼルへの書簡と判断したものは、上記以外の書き出しで始まり、主格は **ich**、末尾に署名もないものが多い。また特徴的なのは、ハンス・ベルンハルトからバーゼルへの書簡の末尾に記されている日付(年)がラテン語表記の「LXV」すなわち「65年」であるのに対し、バーゼルからハンス・ベルンハルトへの書簡の場合は一貫して「65年」(第 9 通のみ「66年」)の直前に解読不能の記号を伴っていることである。おそらくは「1400年」を示すラテン語表記「MCCCC」の略号ではないかと推察するが、それを伴っているものをバーゼルからハンス・ベルンハルトへの書簡、伴っていないものをハンス・ベルンハルトからバーゼルへの書簡というふうにも判断できた。

以上の根拠により発信者と受信者とを特定できるが、そのように特定した場合、第 6 通と第 7 通がハンス・ベルンハルトから、第 8 通と第 9 通がバーゼルからと、それぞれ同じ発信者による書簡が続くことになる。理由はわからない。また第 4 通について、96 ページ 8 行目から 3 行分の文言によると、それ以下 97 ページ 22 行目までの部分は紙片に書かれたもので、94 ページ末から 96 ページ 7 行目までの部分の書簡とは別物らしい。また、97 ページ末の 7 行分もハンス・ベルンハルトによるメモ書きのようなもののように見て取れる。

さて以上をふまえ、まずは 90 ページの内容を検討してみよう。先述したように、90 ページはバーゼル市長と都市参事会による布告である。内容は、体僕クレヴィン・リュッチンの処遇をめぐってバーゼルと領主ハンス・ベルンハルトとのあいだで交わされた以前の協約を確認したものであることが読み取れる。「われわれのものであるクレヴィン・リュッチイ(=リュッチン)は、ブラッテレン(=ブラッテルン)の権威ある領主たる騎士ベルンハルト・フォン・エプティンゲンの下でかつて暮らしていたが、今やわれわれのところバーゼルへ移ってきている。くだんのベルンハルト殿はいくつかの理由もあって彼にブラッテレンに居住することを禁じ、彼を裁判の場に引きずり出した」(2-6 行) ため、バーゼル側が協約を確認することにより平和的解決を図ったのである。その際にバーゼル側が主張したのは、「われわれのものであるクレヴィン・リュッチンがバーゼルのわれわれの下に居住したいと望む限り、また彼が妻を自分のところに伴いたいと思う限り、ベルンハルト殿の他の従属民と同じように彼に租税を支払い、彼に奉仕すべきであるが、クレヴィン・ルッチイ(=リュッチン)がベルンハルト殿のところブラッテレンへ決して移

りたくない場合、彼はベルンハルト殿とその所有地に奉仕すべきところ、同ベルンハルト殿とわれわれのあいだでかつて結ばれ、印璽を交わした協約の内容に従って、われわれの管区に住まう同ベルンハルト殿の従属民がわれわれとわれわれの管区役人に対しおこなっているのと同じようにおこなうべきである。」(10-18 行) ということであった。ここでの協約とは、領主ハンス・ベルンハルトの体僕がプラッテルンを離れてバーゼルもしくはバーゼル領内に移住してきた、あるいはすでに移住していた場合に、バーゼルの庇護民としてハンス・ベルンハルトに対しどのような義務を負うか負わないかを取り決めた都市・領主間の権利関係をめぐる協約であったことが読み取れよう。協約そのものは1465年7月15日の日付で交わされたものと推察される¹⁶。

バーゼルがクレヴィンをすでに自領の庇護民として「われわれのもの」と認識し、その立場で布告を出していることに留意するなら、続くバーゼル側の見解は示唆的である。まず、「しかし彼(クレヴィン)は、彼(領主)の下に居住していないがゆえに、自分の家畜ともども住居も牧草地もプラッテルンに所有すべきではない。それゆえ彼(クレヴィン)が自分の土地以外の場所でもまっとうに行動できるよう手を打たねばならない。彼は耕作用の馬をその場所で放牧してよい。彼は自分の土地から得られた収穫をも、ベルンハルト殿の農民と各々がそのために支障をきたさない、ちょうど今いる場所に移動させ、置いてよい。」(18-25 行) と、協約の内容に沿った措置をクレヴィンに義務づけることによってハンス・ベルンハルトに配慮を示しながらも、しかしクレヴィンの生活をバーゼル側で保障する意思を示し、彼の権利を巧みに擁護していることが読み取れる。次いで、「くだんのクレヴィン・リュッチンはベルンハルテン・フォン・エプティンゲン殿のところから離れてしまった上の娘を彼のところへ戻すために、あらゆる努力と方策を講じるべきである。それに対し、くだんのベルンハルト殿は自らの権利、すなわち彼(クレヴィン)に禁じ、彼を裁きの場に引きずり出そうともくろんだ、クレヴィン・リュッチイの土地に関する権利を、実行してもよい。」(25-29 行) と、ハンス・ベルンハルトの体僕領主権を尊重しながらも、「ただし…」(29 行) と留保条件をつけて牽制する。さらに、「またベルンハルト・フォン・エプティンゲン殿が同クレヴィン・ルッチンの1人もしくはそれ以上の子どもたちの聖なる結婚に関して面倒を決して見たくないと思んだ場合、そのことについて彼はクレヴィン・ルッチイも呼び出させて、彼の意向とともにそのことを話し合うべきである。」(32-35 行) と、クレヴィンの子どもが結婚において不利益を被ることがないように配慮を示す。領主ハンス・ベルンハルトの体僕でありながら、バーゼルにとっては庇護民であるクレヴィンを、全体としては擁護するための議論をバーゼルは展開したのである。

90 ページ末尾はいわゆる総括である。「そしてこのような協約にもとづき、ベルンハルト殿そしてクレヴィン・リュッチイもまた、この書状の日付まで続いたすべてのこれまでの軋轢や問題を、完全に調整して示談にすべきである。くだんのわれわれの参事会の友人たちがわれわれにそのことを申し述べたとき、それを双方にはあえて宣誓なしで維持し実行することを誓わせ、約束させた。それを記録にとどめるべく、われわれは両者の願いによって、わが都市の秘密の印璽をこの書状にぶら下げさせた。われわれ、そしてわが子孫に害とならないように。」(35-42 行) と、バーゼルは紛争の調整と示談を勧めて仲裁者らしい文言で締めくくり、その役割を果たしたので

あった。この書状によって先の協約は更新されたが、同時にこの書状が先の協約よりも大きな拘束力を持つ新たな協約として機能することに双方の合意が取り付けられたことをも示している。

しかし紛争がさらに続いたことは往復書簡から明らかである。第 1 通でバーゼルは、「彼（クレヴィン）自らが姉に掛け合って、娘を貴殿（ハンス・ベルンハルト）の手に戻すためのあらゆる努力をすべきだと、われわれはクレヴィン・リュッチンと取り決めた。」(91 ページ 7-10 行)「それゆえ、貴殿が彼の妻と子どもを解放して彼のところに戻すことをわれわれは貴殿に強く要望する。われわれは貴殿が公正に協約に従って良心的に行動することを求めるのである。」(91 ページ 11-15 行) と述べ、ハンス・ベルンハルトが協約に反してクレヴィンの妻子を拘束したことに強く抗議している。しかし第 2 通でハンス・ベルンハルトは、「娘が私の手許に戻ってきたら私は喜んでくだんのクレヴィの妻を拘束から解放しましょう。」(92 ページ 6-9 行) とし、「彼の娘は私の体僕である。」(92 ページ 14 行) と根拠づける。また、「息子については、彼が従順に振舞うならば嫁を取らせましょう。」(92 ページ 14-15 行) としながら、「宣誓に際し彼はそれを軽んじ、おこなわなかった。」(92 ページ 17-18 行) と、息子が反抗的であることを非難する。さらに、「彼（クレヴィン）は、私が彼をブラッテレンから力づくで正当性なしに追い出したと、あなたがたの前で私を公然と非難した。」(92 ページ 21-23 行) と、クレヴィンにも矛先を向ける。そして最終的に、「彼（クレヴィン）がブラッテレンから移動して私に（バーゼルの）庇護民として奉仕することを望まないのであれば、ブラッテレンに自有地も家も持つべきではないし、バーゼルでパン焼きでも粉挽きでもすればよいし、人の家の厄介にでもなればよい。」(93 ページ 6-10 行) と、斬って捨てるのである。これに対し第 3 通でバーゼルは、「貴殿がわれわれのものであるくだんのクレヴィン・リュッチンに、妻を無償で拘束から解き放って彼に従わせてやることを、われわれは貴殿に対しこの書状をもって強く要望する。」(94 ページ 15-18 行) と重ねて求める。しかし第 4 通でハンス・ベルンハルトは、「彼の妻子は私の体僕である。」(95 ページ 9 行) とし、「私は公正に対処したし協約にも違反していない。」(95 ページ 10-11 行) と強調する。さらには、「私はクネヒト¹⁷、妻子を正当に処したいが、その際に何が正当なのかを皇帝の法に従って吟味させる。」(95 ページ 18 行) と、自分が従うのは都市バーゼルではなくハプスブルク家であることを示唆し、「正義に従って彼（クレヴィン）のことは私の高級裁判権でおこなうべきである。」(95 ページ 18-20 行) と主張するのである。バーゼルはこれに対し第 5 通で、「哀れなクネヒトの妻を協約に反して捕らえた。貴殿はそれが不公正であることを自身でわかっていたでしょう。」(98 ページ 9-12 行) とし、「われわれのものの中で貴殿が彼に妻を拘束から解放して彼に従わせてやることをわれわれは求め、要望する。」(98 ページ 13-15 行) と、あくまで態度を変えない。こうして両者の言い分は平行線のまま第 9 通までやり取りは延々と続くのである。

以上の経過より、次のことが確認できよう。体僕クレヴィンがブラッテレンからバーゼル領に移住していたことも領主ハンス・ベルンハルトにとって問題ではあったが、それ以上に、クレヴィンの娘がブラッテレンから離れ、おそらくはバーゼルに留まったまま帰ってこないことがハンス・ベルンハルトにとって大きな懸案となっていたのである。彼はクレヴィンの娘の帰還にあくまでこだわり、クレヴィンの妻と息子をいわば人質として拘束したが、そのことがクレヴィンの

みならずパーゼルとの対立を深めることとなったのである。パーゼルはこの紛争の仲裁者であるとともにクレヴィンの庇護者として彼の権利を擁護できる立場にあった。ハンス・ベルンハルトと粘り強い交渉を続けながら、パーゼルはクレヴィンを介してプラッテルンの農民を後方支援する姿勢を示すことによって、彼らに対領主行動に駆り立てる1つのきっかけを与えたと見ることもできよう。

IV. 体僕制紛争の意義

体僕クレヴィン・リュッチェン事件の結末は、史料が存在しないため不明である。紛争に関しては裁判史料が貴重な情報源となるが、本件に限らず、この種の紛争が最終的にどのように決着したのかを知る直接の手がかりはほとんど存在しないといってよい。したがってここでも、体僕制をめぐる紛争の争点と、当事者間の関係を整理しておくにとどめざるをえない。

体僕制紛争は、領主・農民のみならず、紛争解決に仲裁者として関与した都市をも交えた都市・領主・農民の相互関係において把握されなければならない。体僕が仲裁者たる都市の領内に移住していた場合には、その体僕は都市にとっては庇護民であり、そこに直接、都市の利害が絡む関係が成立したからである。領主にとっての関心事が移住した体僕の処遇にあり、都市による仲裁の焦点もそこにあったことはいうまでもないが、それ以上に領主が体僕の個々の親族により強い関心を抱いていたことが史料から読み取れる。ここでは、領主が体僕の妻と息子を拘束してまでも、都市に移住していた体僕の娘を帰還させることに執着したことが特徴的である。体僕の妻子もまた領主の体僕であり、臣従義務があることを領主は顕示したのである。しかしこのことが都市との緊張関係を増幅させることとなった。都市は領主に対し体僕の妻、息子の無条件の解放を求めて交渉し続けたが、ここに仲裁者と利害関係者という都市の2つの顔が見え隠れしている。体僕（庇護民）擁護を貫く都市の姿勢は、村落農民全体に対しても反領主感情をいっそう高め、彼らの抵抗運動を促進する方向に作用したであろう。都市はさまざまな紛争の仲裁者として地域の平和構築に一定の役割を果たしたが、それが15世紀における都市の領域拡大のプロセスと連動していたとすれば、体僕制紛争はその重要な契機の1つであったといえるだろう。

註（紙幅の都合上、最小限にとどめた。）

¹ 日本における研究として、服部良久『アルプスの農民紛争』（京都大学学術出版会、2009）など。

² Grimm, Jacob(Hg.), *Weisthümer*, 7 Bde., Darmstadt 1957 (1.Aufl. 1840-1878) のほかに、プファルツ、バーデン、オーストリアなどのヴァイステューマーが刊行されている。ヴァイステューマー研究についてはさしあたり、服部良久「ヴァイステューマー研究の課題」『史林』65-1(1982)、136-160 ページを参照。

³ パーゼル郊外東部の小都市リースタールに当古文書館があるのに対し、パーゼル市内に都市邦国立古文書館(Staatsarchiv des Kantons Basel-Stadt)がある。

⁴ 詳しくは、http://www.baselland.ch/aa_best-htm.289071.o.html を参照。

⁵ チューリヒ、ルツェルンについては、Blickle, Peter, *Friede und Verfassung*. in: *Historischer Verein der Fünf Orte(Hg.), Innerschweiz und frühe Eidgenossenschaft*, Bd.1, Olten 1990, S.134-156. ベルンについて

は、Gerber, Roland, *Gott ist Burger zu Bern*, Weimar 2001, S.377-466.

⁶ Boos, Heinrich(Hg.), *Urkundenbuch der Landschaft Basel*, 2 Bde., Basel 1881/1883 に多数の事例がある。

⁷ 以下、15世紀後半エプティンゲン家支配下のプラッテルンについては、Rippmann, Dorothee, *Unbotmäßige Dörfli im Spannungsverhältnis zwischen Land und Stadt*. in: Pfister, Ulrich(Hg.), *Stadt und Land in der Schweizer Geschichte*, Basel 1998, S.110-156. Rippmann, Dorothee, *Gemeinde im Widerspruch: Soziale Unrast und Bauernunruhen*. in: *Nah dran, weit weg*, Bd.2, Liestal 2001, S.197-212. 田中俊之「中世末期の北西スイスにおける領主・農民間紛争の展開—村落プラッテルンの場合—」『北陸都市史学会誌』14(2008)、1-13 ページを参照。

⁸ Bierbrauer, Peter, *Bäuerliche Revolten im Alten Reich*. in: Blickle, Peter(Hg.), *Aufbruch und Empörung?*, München 1980, S.1-68. Blickle, Peter, *Von der Leibeigenschaft zu den Menschenrechten*, München 2003.

⁹ 三成美保「14-16世紀の西南ドイツにおけるライプアイゲンシャフト—特に結婚制限について—」『阪大法学』135(1985)、123-167 ページ、三成美保「15-16世紀ドイツ＝スイス地域における死亡税—『西南ドイツ型』ライプアイゲンシャフトに関する一考察—」『阪大法学』143(1987)、147-189 ページ。

¹⁰ Boos(Hg.), *Urkundenbuch*, Bd.2, S.1018 (Nr.858).

¹¹ Rippmann, *Das Dorf und seine Menschen*, in: *Nah dran, weit weg*, Bd.2, S.126f. に1464/65年のプラッテルン住民119名の個人名が男女別、体僕・庇護民別に挙げられている。

¹² Rippmann, *Gemeinde im Widerspruch*, S.204.

¹³ Rippmann, *Das Dorf und seine Menschen*, S.126f. Rippmann, *Gemeinde im Widerspruch*, S.204.

¹⁴ さしあたり、Schreiner, Klaus/Schwerhoff, Gerd(Hg.), *Verletzte Ehre*, Köln/Weimar/Wien 1995. 田中俊之「名譽の喪失と回復—中世後期ドイツ都市の手工業者の場合—」前川和也編著『コミュニケーションの社会史』（ミネルヴァ書房、2001）、409-432 ページを参照。

¹⁵ Dürr, Emil(Hg.), *Aktensammlung zur Geschichte der Basler Reformation in den Jahren 1519 bis Anfang 1534*, Basel 1921, S.254. 野々瀬浩司『ドイツ農民戦争と宗教改革』（慶應義塾大学出版会、2000）、166-167 ページ。

¹⁶ Boos, *Urkundenbuch*, Bd.2, S.1024f. (Nr.866).

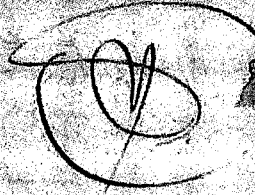
¹⁷ ドイツ語の *Knecht* は多義的であり、ここではあえてそのまま「クネヒト」とした。

【凡 例】

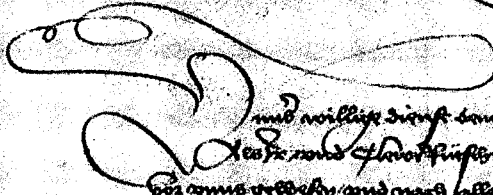
- 1) 大文字、小文字、「/」印は史料の現物のままに記した。現物の史料にカンマ、ピリオドはなく、文の切れ目、文節の切れ目と、大文字、小文字、「/」印との関連性はどこにもない。
- 2) 史料の現物では単語末にしばしば「ひげ」印が見られるが、これは省略記号であり、適宜[]で補った。
- 3) 「u」と「v」の区別は厳密ではない。例えば und はすべて vnd と表記している。「a」と「o」、「i」と「j」の区別も同様である。
- 4) ウムラウトに相当する部分については、その形状から判断して、ü, ü, ũ, ũ など適宜区別して記した。
- 5) 「s」と「z」もそのまま記したため、例えば現代語の lassen はここでは laszen などと表記されている。
- 6) 不明の箇所はいずれも「.....」と記した。

90 ¹

Wir Hanns von Berenfels Ritter / Burgermeister vnd der Rate
zû Basel / Tund kunt menglichem mit disem brieffe Als Clewin
Rûtzschy der vnser / vnde[r] dem Strengen h[e]r[r]n Bernharten von Eptingen
Ritter ze Brattellen gesessen gewesen / vnd aber nu zû vns her in gen
5 Basel gezogen ist / der benant her[r] Bernhart Im ouch von ettlicher / vr=
sach wegen das sin ze brattelen verbotten / vnd In gerichte gezogen hatt /
habent wir durch vnserere erbere Ratffrunde / nemlich / Peter Schonkint
Bernharten von Louffen / vnd Clausen von Andlo / solich Spenne so zwusche[nt]
inen gewesen sint gutlich ubertragen laszen / In massen her nachgeschriben
10 stat dem ist also / Das alle die wile / Clewin Rûtzschin der vnser
by vns zû Basel gesessen sin ~~solle~~ wolle / das er denn sin husfrowen
By im haben / moge / doch das die als andere / her[r] Bernharts lute im
Sturen vnd dienen solle / Wurde aber Clewin Rutzschy keynest /
wider vnder her[rn] Bernharten gen Brattelen ziehen / alsdenn sol er her[r]
15 Bernharten vnd sinen erben / dienen vnd thûn nach innhalt des uber=
trages der zwuschent dem selben her[rn] Bernharten vnd vns vormals
gemacht vnd versigelt worden ist / als des selben her[rn] Bernharts lute
In vnseren Empteren gesessen vns vnd vnsern Amptluten / tûnd die
wile er aber also nit vnder im gesessen ist / so sol er mit sinem viehe
20 weder wunne noch werde / zû Brattelen nyessen denn allein so
er do vszen sinen gûteren Rate tûn mûsz das er ouch wol thûn mag
So mag er sine Rosse die er dazû bruchet / wol da selbs weyden / Er
mag ouch den Roube siner gûteren wol fueren vnd legen wa im das
eben ist / Her Bernharts halb vnd menglichs von sinen wegen vnge=
25 hindert / Ouch sol der benant / Clewin Rûtzschin allen sinen flisze vnd
vermoge[n] tûn / obe er sin groszere tochter die sich her Bernharten von Eptinge[n]
empfreundet hat / im wider zû handen bringen moge / Dagegen mag
der benant her[r] Bernhart sin recht so er vff / Clewin Rûtzschys gût das
er Im verbotten vnd in gerichte gezogen furgenome[n] hatt / volfueren / doch
30 also / ob im gegen / Clewin Rutzschy mit recht vtzit erkennet werde
das daz zû vns von Basel hinstan solle im vtzit oder nutzit darumb heische[n]
ze tûnde / wolte ouch her Bernhart von Eptingen desselben / Clewin Rutz=
schi[n]s ~~ouch~~ kynden eyens oder me zû der heiligen ee keynest versorgen
dazû sol er Clewin Rûtzschy ouch laszen berûffen vnd das mit sinem
35 willen verhandelen / vnd uff vnd mit solichem / vbertrage sollent her[r]
Bernhart vnd ouch Clewin Rûtzschy vmbe alle vergangene Spenne vnd
sachen ~~vnd sachen~~ bis uff datu[m] dises brieffs gantz / vnd gar gericht vnd
geschlicht sin das sy ouch zû beden syten by truwen an eyden statt ze hal=
tende vnd ze tûnde gelopt vnd versprochen / als die benan[ten] vnserere Ratsfrunde
40 vns das furbracht handt / des zû vrkunde habent / wir von ir beder
teyle bitte wege[n] vnser Statt Secret ingesigel lassen hencken an disen
brieff doch vns vnd vnsern nachkome[n] iren halb one schaden / Geben
vff sant Peters / den Ersten tag im Ougsten Als man zalt nach Christi ²
vnser h[e]r[r]n geburt Thusent vierhundert Sechzig vnd funff iare etc



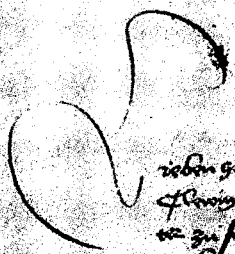
Im Namen der
Gemein der
Stadt



und willige dinst bevor haben die
Acht und vierzig der Stadt / uff gepet
der Gemein der Stadt / und nach alle dem / on alle ge-
pördten sein / haben wir mit / dem
meister das er alle die zu seiner
schiff sein / ob er sein / zu unsern
meist / das selbe selbe / und
da wir hoffen / das wir
hören wir an / mit
und / das
den zu der / dem
nie / gebunden /
sein /

1550

Im Namen der
Gemein der
Stadt



haben wir / dem
Acht und vierzig / die
zu seiner / ob er
den /

Dem Strengen her Bern=
harten von Eptingen
Ritter /

Unns[er] willige dienst bevor Lieber her Bernhart /
5 Als Ir vnd Clewi Rüttschi der vnnser / uff gester
vor vnns gewesen / vnd nach allerley rede on³ ende ge=
scheiden sint / Haben wir sovil / mit Clewin Rüttschin
verschafft / daz er selbs sich zü siner swester fügen / vnd allen
vlissz⁴ tün solle / ob er sin tochter zü ûwern⁵ handen bringen
10 möge / vnd solichs vlisses sol er glöuplich⁶ vrkünde brîngen
Da wir Hoffen er werde dem nach gan / Daruff / so
begeren wir an ûch mit ernst bittende / daz Ir Im sin husfrowen /
vnd kinde / ledig vnd zû Im komen lassen wellent / Daz begeren
wir zü der billichkeit / dem ûbertrage nach dennoch / vmb
15 ûch / gütlich ze verdienen / vnd des ûwer antwurt by di=
sem botten Geben vff Dēnstag vor Martini Anno⁷
Lxv

Hanns von Berenfels Rîtter
Burgermeister vnd der Rate
ze basel

Lieben h[e]r[r]n / noch dem ûwer Wisheit / mir verschriben hatt /
Clewin Rüttscheis halb / wie domit Im verschafft sig⁸ / die toch=
ter zü sûchen / vnd sin flisz ze bringen / ob er sÿ zü minen han=
den bringen mög / vnd sol des glöuplich / vrkund bringen /

- daz er semlichen nochgangen sig doruff ûwer wisheit be=
 gert sin wip / vnd kind / ledig zûlassen / fûrsichtigen wÿ=
 sen lieben h[e]r[r]n / wo Ich ûch zûwillen ston könd⁹ / do wölt Ich
 willig sin / wen In dem daz Ich / nit wol getûn kan / dann
- 5 wie Ich die mûter / usszliesz¹⁰ / ob die tochter zû minen han=
 den kêm / so wurd mir / die tochter entfrömt / Wann aber
 die tochter zû minen handen ~~komen~~ brocht wirt / Wil Ich
 darinn gütwillig sin / des genanten Clewis wipp / usser ge=
 vängnissz zûlassen Wo aber das / nit beschicht / vnd
- 10 Claus / vrkûnd bringt / sins vlissz / so sol Ich sinhalb benûgsam sin
 nach Inhalt des ûbertrags vnd fûrer besêchen¹¹ / ob die
 Tochter / Ir mûter ledigen wolt / Vnd sÿ so lang behalten /
 bissz es beschicht / als Ich das von billichem tûn mag / noch
 dem sÿ / vnd Ir tochter / min lib eÿgen sind / des sûns halp
- 15 Wen[n] der In gehorsame sich bewist / ein wip zû nemen /
 so wil Ich In / ûwer geniessen lassen / vnd die bott / so Im
 von mir persönlich / ouch vom vogt / bim eid / gebotten
 wurden / die er veracht / vnd nit gehalten hatt / Vnd halt
 ein beduren / daz ûwer wisheit / sich sovil mügt von der
- 20 Vnbenuigen Lûten wegen / als sÿ sich zûvil / In vnbilligkeit
 bewisen / als ûwer wiszheit / gehört hatt / wie er mich offen=
 lich / vor ûch geschuldiget / Ich hab In von Brattellen mit
 gewalt / vnd on recht vertriben / daz nit / an Im selb Ist /
 Hett er wellen tûn als annder / ouch als / betedinget was /
- 25 daz er thûn solt / was die minen / In Waldemburger amt /
 ûwer wisheit tetten / do Im minder angemûtet wart /
 als sich darnach befand / noch Inhalt / der brieff dorüber
 gemacht / hett er dobÿ wellen bliben / wer min will /
 wol gewesen / Do er aber des willen / nit sin / Wolt / was
- 30 billich / daz er dann sich dannentët / Ouch als er sich /
 beclagt / vnd die vnworheit¹² brücht / Daz Ich / In lossz

ûwer engelten / des ûwer wisheit wol / vnderricht mag sin /
 durch die botten / so das ûbertrûgen / daz Ich Im / vnd sin wip /
 vnd kinden abliessz / dorumb Ich sÿ In recht genomen hatt do /
 mir vnder Drissig pfunden nit / zûfal bekent worden wër /
 5 So nit zwifel Ist hett er ûwer wisheit nit genossen es wër
 durch sinen willen nit beschëen / ouch gemacht wart / sit er
 mir nit dienen wolt / als ein hinder sessz¹³ / daz er dann von
 Brattellen ziechen / vnd zû Brattellen kein eigen fûr / noch
 huszhabung haben sôlt / Sunnder zû / Basel bachten / vnd
 10 malen / oder an eim¹⁴ / wirt / cost nemen ob er zû Brattellen / zû
 Buw¹⁵ / siner güteren bruch haben wolt / Daz er nit geton hatt /
 Sunnder zû Brattellen / mit malen / vnd bachten / ouch mit
 holtz / vnd mit anderem / so Im ûbertrag / nit statt / sin bruch
 als wol gehatt als annder / Do Ich nit wont / daz solich entfröm=
 15 dung / vnd abbruch im ûwerem vngelt gestatt wurd / Ich
 ouch fûrer Im sôlich bruch / vnd huszhabung nit me gestatten
 kan / vmb sin vntûr bewÿsung willen / Ich bitt ouch ûwer /
 wisheit / solichs gen mir / In argem nit zû vermercken / dann
 Wo Ich willen vnd dienst / ûch bewisen könd oder möcht
 20 Do wôlt Ich allzitt willig sin / Geben vff Sambstag
 vor Sannt martins tag Im Lxv Iar

Hannsbernhart
 von Eptingen

Dem Strengen h[e]r[r]n Bernharten
 25 von Eptingen Ritter /

Unns[er] willige dienst bevor Lieber Her Bernhart

ûwer schriben vnns / Als von Clewin Rütshins / des vnn=
 sern wegen yetz¹⁶ zûgesant / habent wir verstanden / vnd nimpt
 vnns / die eben schimpfflich vnd frömde / vnd wöltent wol /
 daz Ir / den ûbertrage anseent / vnd die frowen / als derselb ûber=
 5 trage wiset Irem man volgen gelassen hettent / denn die frowe
 darinne nieman gemeldett stat / daz sÿ ûch die Tochtër / sölle
 zü handen bringen / oder hafft fûr sy sin / So zûhent Ir ouch
 mëngërleÿ In / das Ir meÿnent / dem vnnserm nit me / zûge=
 statten / so er sin gûter bûwen sol / ûber das der ûbertrage / wiset
 10 daz er mit sinem zuge / sine gûtere buwen / Vnd den wuchs
 davon nêmen möge / Vnd fûren wohin Im das eben sÿe /
 Darinn / Im ouch / billich erlaubet Ist / bachten / malen / vnd
 das Im / zü libs narunge notdurfftig Ist / Als Ir / so Ir ûch
 recht bedenckent / selbs wol verstand / billich sin / Wie aber
 15 dem allem / So vorderent vnd begerent wir / an ûch / mit
 dirre geschrifte / mit ernste / daz Ir dem benanten Clewin
 Rütshin / dem vnnseren / sin husfrowen / one engeltnisse¹⁷ / usz
 gefengknisse / vnd volgen lassen ouch fûrer / mit Inen beden
 dhein nûwerunge / me fûrnemen / Sunnder sÿ nach Inn=
 20 halt des ûbertrages / bliben lassen wöllent / denn sölte / sölchs
 nit gescheen / so hettent wir / das ÿe / nit gern Vnd mü=
 stent gedenccken / ouch darzû zetünde / als sich geburt / Vnd
 des ûwer antwurt // mit disem botten Geben vff Samb=
 stag vor Martini / Anno Lxv to

Hanns von Berenfels Rîtter
 Burgermeister vnd der Rate
 zü Basel

Nochdem ûwer wisheît / mir yetz zwuren¹⁸ geschriben

- hat / Clewin Rütshins wips vnd sins halp doruff Ich ûwer
 wisheit / vff yeglichen brieff / ein antwort zûgesant hab
 Do Ich truwen von ûch benügsam sig / Vnd wer sich der
 frowen / vnd des knechts an nemen well / Nu kunt mir
 5 fûr / wie Clewi Rütshi / ettwas tröwwert bruch / ouch der frowen
 frûnd verbotten hab / nit von Iren wegen zûreden / Dann
 er woll / lib vnd gût daran setzen des Ich nit besorge wie wol
 solich sine wort nit billich bescheen / sitt Ich glicher billicher / recht
 Urbûtig bin / ouch sin wip / vnd kind / min lib eygen sînt /
 10 Vnd mit In / nit annders handel dann Ich / noch der
 billichkeit / zûtûnd hab / Vnd das wider den ûbertrag / nit Ist /
 Vnd ob aber Clewin / oder yeman / vermeinen wolt / daz
 Ich dowider thëtt / der mag der glichen billichenbott / so Ich
 geton hab / Im nechsten brieff bestimpt / eins uffnemen / Vnd
 15 do besechen lassen / ob wider den ûbertrag geton werd / Desglich
 so wil Ich / den knecht / der frowen sün / fûr recht stellen / Vnd
 Im do bescheen lassen / was recht gitt¹⁹ / nach ordnung keyser=
 lichts rechten / do Clewi / noch nieman / dowider / noch der
 billichkeit / tûn sol / noch mag / sitt er In minen Hohengerich=
 20 ten / vmb verwûrckung gefangen Ist / Vnd das wirt be=
 scheen / vmb das Clewi vnd menglich sechen / daz Ich nit
 annders handeln wil / dann recht Ist / do Ich nit getruw / daz
 Im / oder yeman von ûwer wisheit gestatt / oder verhengt
 werd / dowider zûtûnd / Ob er aber / so vntûr / sin wolt /
 25 Vnd dorin / vnd an den Rechtbotten / Von mir bescheen / ver=
 achtung thett / oder thun / wolt / daz dann Im / von ûwer wisz=
 heit vnd von allen den / so ûch / zûversprechen stond / hilff /
 vnd Rott / schirm vnd enthaltmissz / ouch bystand / abgeschla=
 gen werd / Vnd mir / vnd wen Ich darzû bruch / das
 30 gestatt wërd / Vnd kein Irrung beschëch / dem wider stand
 zû tûnd / wo er sôlich recht ~~sûchen s...ehen~~ schûhen wolt / Wo
 aber In / oder yeman annders / der sich der frowen / Vnd
 des knechts / annemen wolt / nit bedunckt / Daz Ich rechts /

gnüg gebotten hëtt / der mag mir / recht bietten / oder Ich
 wil Im me bietten / Vnd bitt ûwer wisheit / mit flissigem²⁰
 ernst / vff daz mit Clewin Rûtschi zu verschaffen / oder wer
 dowider thûn wolt / semlichem min herbietten / nit uszze=
 5 gend / des wil Ich allzitt gütwillig sin / umb ûwer wisz=
 heit ze verdienen / Des ûwer antwurt / Geben vff /
 Sannt Martînus tag Im Lxv Iar /

Dissz Ist ~~ein-zed~~ Inhalt eins zedels²¹
 In der nechstgeschribnen missinen
 10 beschlossen gewesen

Lieben h[e]r[r]n / als ûwer wisheit / mir nechst / vor diser ge=
 schrift geschriben hatt / doruff Ich ûch geantwurt hab / Dorin
 ûwer wiszheit / nûtzit vnzimlich von mir verstatt / Do
 aber ûwer wiszheit // min fûrnemen / hoch verfocht / mit
 15 Strênger / vorderung / die minen ledig zu lassen / daz Ich
 nit schuldig bin / ouch der ûbertrag / mich sowitt / nit bînt /
 Vnd hett wol getruwt / Ich wûrd von ûch / so wit / nit
 ersûcht / sit Ich billicher recht / vor ûwer / wisheit / vff min
 gnêdigen h[e]r[r]n von Basel / urbûtig gewesen bin / oder wo daz
 20 von billicherem hinhören wer sitt aber ûwer wisheit /
 den ûbertrag ouch min fûrnemen / ~~oder~~ andders ver=
 mercken wellen / dann Ich trûw / daz der ûbertrag Inhalt /
 mich dheimerleÿ / Irren / an dem minen / so bût Ich ûch / oder
 wer sich der frowen / oder des knaben / annemen wil / recht
 25 vff min gnêdigen h[e]r[r]n / von Basel / oder vff siner gnaden
 Official / der des gantzen Bistums / geordneter Richter
 Ist / Wo aber das yeman / nit genûgsam beduncken wolt
 so bût Ich es zûkomen zû recht vff min gnêdigen h[e]r[r]n / den /

- Marggraven / von nidern baden / oder vff minen gnädigen
 h[e]r[r]n / den Marggraven von Rötellen / oder vff siner gnaden
 lantvogt / her Hannsen von Flachslan / oder vff minen
 gnädigen h[e]r[r]n / von Busznang / oder vff minen gnädigen h[e]r[r]n
- 5 Graff Oswalt von Tierstein / oder vff minen gnädigen
 h[e]r[r]n von Rappolstein / oder vff Schultheissz vnd Rott zû
 Bern / oder vff Burrgermeister vnd Ratt zû Zûrich / oder vff
 Schultheisz vnd Ratt zû Soloturn / oder vff Schulth[eis]s vnd
 Rot zû Lutzern / oder vff gemein Eidgenossen / oder vff mi=
 10 ner gnädigen herschafft / von Österrich / Lantvogt vnd
 Rëtt / do Ich billicher fûrt gevordert wurd / dann also besûcht
 noch dem Ich / vnder miner gnädigen herschafft von
 Osterrich / sitz / vnd Ir zû versprechen stand / Vnd trûw /
 daz der Rechtbott eins / von mir vffgenomen wërd / odër
 15 gelossen / vnangevordert / von ûwer wisheit / vnd den
 ûweren vnd bitt do by ûwer wiszheit mit flisszgem ernst
 mich an den minen vngehinderet / ouch mich by dem
 minen zû lossen / ouch den ûweren / wider sôlich rechtbott /
 gen mir fûrzünemen gestatten / ouch selbs nit thûn /
 20 sunnder der Rechtbott eins vffnemen ob Ich vnangevor=
 deret erlassen nit bliben mag / Geben vff Sombe[s]=
 tag vor Sannt Martins tag Im Lxv Ior

- Ouch ob ûwer wisheit / oder yeman annders / der fro=
 wen / vnd knaben halb / nit vermeinen wolt / daz
- 25 Ich gliche / recht / gnüg / botten hëtt / der mag mir / recht bïetten /
 Ist dann / daz sÿ zimlicher / vnd billicher / von mir / uff=
 genomen / werden / vnd gemeinsamer sind / dann die min /
 so wil Ich noch der billichkeit / gnügsam antwurt doruff
 geben /

Dem Strengen hern Bernharten
von Eptingen Ritter

Unns[er] willige dienst bevor / Lieber her Bernhart / Als
Ir vnns von Clewin Rüttschi / des vnnsern wegen /
5 vff vnns letst schriben / zwen brieffe zūgesant Vnd dar=
inne nach menigerleÿ Inzūgen / die vnns für ware / eben=
schimpfflich vnd nit vil zū güter / nachburschafft die=
nende / beduncken sin / gemeldet vnd mengerhand Recht=
bott / für geschlagen vnd aber dabÿ nit destminder / des
10 armen knechts husfrowen wider den ûbertrag / In geveng=
nisse hand / Do Ir selbs wol verstand / daz vmbillich
wëre / daz yemand gepfendet / zū rechte komen solte /
Harumbe so vorderen / vnd begeren wir / von des vnnsere
wegen / daz so Ir Im / sin hüsfrowen / usz gevencknisse / vnd
15 volgen lassen wöllent / Als denn sol er / ûwer Rechtbott /
vff vnnsere gnädigen h[e]r[r]n von Basel vffnemen / vnd
sich dagegen ûch / mit rechte / entscheiden lassen / vnd
des ûwer antwort / mit disem botten / Geben vff /
mitwoch nach martini Anno Lxv to²²

20 Hanns von Berenfels Ritter /
Burgermeister / vnd der
Rate zū Basel /

Als ûwer wisheit / mir ein antwort / vff min schriben
zūgesant hat Ist mir / vff gester worden / Dorinn Ir /

min schriben schimpfflich vnd vnochbûrlich versochen /
 vnd das Ich / mancher hand rechbott / gebotten hab / vnd nit
 desterminder²³ / die frowen Ir gevengnissz halb / wider den
 übertrag das vnbillich klich²⁴ sÿ / do ûwer wisheit selb / wol
 5 verstot daz der Recht eins / vor von Im vffgenomen billichen
 solt werden vor vnd ee sÿ vszgelossen wurd / ouch daz es beschëch /
 daz Ich wist wie / min Ist ûwer misszvallen / In disen dingen
 mir nit lieb / vnd wolt wol / daz ûwer wisheit / gen mir
 nit so beweglich wër / sunnder ansechen / daz ûwer Streng
 10 eenstlich anvorderung mich nôt sôlich geschafft / vnd
 rechtbott zû tûnd / vmb daz Ich / vnfrüntlich zûfügung /
 gen mir / vnderwegen blib / ouch noch hût bÿ tag / gern wolt
 daz ûwer vnwill / sich minderet vnd mich liessen In gûter
 nochburschafft / mit ûch bliben sÿtt Ich doch nûtz vnbillichs /
 15 gen allermenglich begër / vnd niemans billicher ding begër
 vor zû sind / als Ich ouch gern hett / daz sôlichs mir beschëch /
 des Ich billichen geniessen vnd gen nieman / engelten solt /
 als dann der frowen halp / wie do ûwer wisheit / In anvor=
 derung Ist / sÿ vsser gevengnissz vnd dem ûweren / zû vol=
 20 gen zûlassen / als dann sol er das rechtbott / vff min gnë=
 digen h[e]r[r]n / von Basel vffnemen / vnd sich / do mit recht
 entscheiden lossen / dobÿ Ich es gern / wil lossen bliben / vnd
 die frowen / harusz lossen / so verr / daz mir sicherheit / geben
 wërd // daz der genant Clewin rütschi / dem nochgang /
 25 vnd daz es Im ein bestimmten zil beschëch / vnd wo das / nit
 beschëch / ouch ob Ich Im / anbehüsz / daz sÿ mir dann / wi=
 der zûhand / als yetz / geben / vnd brocht werd // als Ich trûw /
 ûwer wisheit / selb billichen beduncken sôll / ouch daz / nûtz
 destermindër / der ûwer / der tochter / nochwerbung tü /

mit flissz vnd vermugent²⁶ / als das / In der übertrag bint /
 Vnd daz es / In eim bestimpten zil / beschëch / geben vff
 Samstag / noch Sannt Martins Im Lxv Ior

Lieben h[e]r[r]n / noch dem / Ich / ûwer wisheit vff ûwer schriben /
 5 verschriben hab vnd doruff begert / ûwer antwurt / daz
 noch bisz har²⁶ / sich lang hatt dorvff Ich noch hûtbÿtag²⁷ beger
 ûwer antwurt / mich wissen / darnach zûrichten / dann mit=
 sôliche trôw wort fûrkomen / dorumb / mir not Ist / zûwissen /
 wes Ich mich gen ûwer wisheit / ouch gen Clewi Rûschis
 10 vnd der ûweren / versehen vnd halten sôll / Vnd bitt damit
 ûwer wisheit / mit flissigem / ernst mir die antwurt / lenger
 nit zû verzîehen / Geben vff Donstag / noch Sannt Mar=
 tins tag Im Lxv

Dem Strengen h[e]r[r]n Bernharten von
 15 Eptingen Ritter

Unns[er]n dienst bevor Lieber her Bernhart / Als Ir vnns
 aber / vff vnnser letst schriben / geschriben hand / Ir /
 wöllent die frowen / vff das vffnemen des Rechtbots / herusz /
 vnd dem vnnsern volgen / lassen / doch mit fûrworten daz er
 20 das recht versichern vnd ob er nit vollzûge / das gesprochen
 wurde / die frowen wider / zû ûwern handen zû antwurten
 Ouch daz er / In einen benanten zile werben / sol ûch / sin
 tochter so entwichen Ist / ze handen ze bringen / mit merer

101

begriffunge²⁸ ûwers briefes / nit not ze melden / habent
wir verstanden / vnd meinent daz ûch sôlicher fûrworten /
vff vnnsere schriben nit not tûe denn Wenn Ir dem ûbertrag /
nach / die frowen one engelnisse / ledig vnd dem vnnsern
5 volgen ze lassen / so mögent Ir vnnsern gnédigen h[e]r[r]n
von Basel bitten / sich des rechten ze beladen tag ze setzen
vnd die sache / zwîschent ûch / vnd dem vnnsern / mit
rechte / ze entscheiden / Desglichen sol der vnnsere / vnd
wir / von sinen wegen ouch tûn / Vnd da dem rechten
10 frags nach gan / dazû wir In / ouch halten wöllent / an
dem Ir billich von Im / vnd vns / ein benügen habent
vnd die frowen daruff wie vorstat herusz lassent vnd bege=
rent haruff ûwer entlich antwurt / Geben vff
Samstag Sannt Othmars tag Anno Lxv

15

Hanns von Berenfels Ritter /
Burgermeister / vnd der Rate
zû Basel /

Dem Strengen her Bernharten von
Eptingen Ritter /

20 Unns[er] willige dienst bevor / Lieber herre Bernhart / Als
vnnsere Stattschreiber ûch / vnnsere nachrede vff ûwer
widerrede / ûwer clage halb vff zû vnns geton / vff Zinstag²⁹ /

mit zwoen künfftigen in einer
 schiedlichen in dreyen geseit zu laste bringe gredie/
 und das in verfassung! Das maner der art uff güt
 uffet ruffen get. da se zu die künfftigen aus
 vordageant! die die amiden geseit! behalden gund
 die dort bitis, bi einander leben! und ein vorder
 drey nich behalden, oder drey vorder geseit! vorder
 drey! die aber dan se seiden von hies vort in uf
 gang des maner nach künfale des aulasses! conlyte
 nachrede verfigen! und das die obgenomnen kün-
 fte die mit amiden geseit! was von drey zu
 geseit! nach künfale des aulasses! conlyte in dreyen
 gen von laste! und den zupflichten! übergeben! also wie
 ang! drey geseit! behalden! man übergeben! seiden
 geseit! mit zu vorder! sind vorder! die aber! konlyte
 künfale! mit zemanen! was übergeben! konlyte
 mit vorder! daumb! se se demog! in vorder! mit
 vorder! vorder! Behalden! off gut! konlyte! nach
 Jony! Jony! ad 277! etc!

Jannus von Bernad Künz!
 Künzmeister und die
 Konlyte

nechstvergangen / mit zweyen / kuntschafften / In einer
 schindelladen³⁰ / In ûweren hof / hie zû Basel / zû geschickt /
 vnd doch In vszrechnung / des monats der erst vff hûtt³¹
 vszgat³² / miszrechnet hat / da Ir nu / die kuntschafften / vns
 5 wider gesant / Vnd die anndern geschriff / behalten hand
 die doch billich / bÿ einander bliben / vnd / eintweder
 durch ûch behalten / oder vnns / wider gesannt / worden
 werent / Wie aber dem / so schicken wir ûch ÿetz / In usz=
 gang / des monets / nach Innhalt des anlasses / vnnser
 10 nachrede versiglet / vnd dazû / die obgemeldetten kunt=
 schafft / die mit anndern geschriffen / ûch / von vnns zû
 gesant / nach Innhalt / des anlasses / vnnserm gnédigen
 h[e]r[r]n / von Basel / vnd den zû sitz lûten / ûbergeben / als wir
 ouch / ûwer geschriff / bÿ legungs Inen ûberschicken sôllent
 15 ÿeglichen teil zû werde sins rechten / Obe aber Ir / vnnser
 kuntschafft / nit zenemen / noch ûberzeschicken meÿ=
 nen woltent / Darumb sol sÿ dennoch / Im rechten / nit
 verhalten werden / Geben vff hût Zinstag nach
³³ / Anno Lxvi ... / toll³⁴ /

Hanns von Berenfels Ritter /
 Burgermeister vnd der Rate
 zû Basel /

史料註

- 1 この 90 ページのみすでに活字化され、Die Historischen und Antiquarischen Gesellschaft zu Basel(Hg.), *Urkundenbuch der Stadt Basel*, Bd.8, Basel 1901, S.202-203 (Nr.257) に収録されている。しかし箇所によっては私の判読とは若干の相違がある。
- 2 上記 *Urkundenbuch* に従って、nach Christi と記した。
- 3 on = ohne
- 4 vlissz = Streben
- 5 úwer = euer
- 6 glöpflich = gelouplich 「おそらく」
- 7 この直前に Anno 「年」が来て、直後に Lxv 「65」が来るので、この不明の略号は「1400」を示すものと思われる。以下、同様の箇所にも該当する。
- 8 sig = sei
- 9 ston = stehen
- 10 usszliesz = ûzlâzen = freilassen
- 11 besëchen = beschechen = geschehen
- 12 vnworheit = unwahrheit
- 13 hinder sessz = Hintersasse
- 14 eim = einem
- 15 Buw = Bau
- 16 ÿetz = jetzt
- 17 one engeltnisse 「無償で」
- 18 zwuren = zweimal
- 19 gitt = gibt
- 20 flissigem = Fleiß
- 21 zedels = Zettels
- 22 右肩の to が何を意味するのか不明のままである。
- 23 desterminder = desto + minder
- 24 klich = gleich
- 25 vermugent = Kraft, Macht
- 26 bisz har = bisher
- 27 hûtbytag = heute
- 28 begriffunge = Verständnis
- 29 Zinstag = Dienstag
- 30 schindelladen = Schindel + Laden = ganz dünnes Holz + Kleiner Kasten / Behälter
- 31 hútt = hütt = heute
- 32 vszgat = zu ende gehen = ausgehen
- 33 この部分に Christi が入るものと思われる。
- 34 この右肩の to ll については不明のままである。

【謝辞】

判読にあたっては、当公文書館のミレイユ・オトナン＝ジラルル女史から直接多くのご教示をいただいた。ここに感謝の意を表したい。また、古文書の写真全 13 葉の掲載についても、オトナン＝ジラルル女史ならびに当公文書館からの許諾を得た。重ねて感謝の意を表したい。